

ノーモア・ヒバクシャ通信 第65号

2023年12月6日

ホームページ <http://www.nomore-hibakusha.org>
継承ブログ <http://keishoblog.com/>
フェイスブック <https://www.facebook.com/kiokuisan>
X(旧Twitter) <https://twitter.com/nomorehibakusha>

発行者
NPO 法人 ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会
〒102-0085
東京都千代田区六番町 15 プラザエフ 6F
Tel/Fax 03-5216-7757 (直通)
Email: info-kiokuisan@nomore-hibakusha.org
郵便振替口座 00110-5-292881
口座名義 ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会

《目次》

- I. 「国連原爆展」Web化のクラウドファンディング結果をご報告します。
- II. Webサイト「NOMORE Hiroshima & Nagasaki MUSEUM」の活用を呼びかけます。
- III. 当会の「認定NPO法人」資格が更新されました。
- IV. 関連活動のご報告
 - (1) 「基本要素」を読み 未来のあり方を考えるー昭和女子大戦後史PJの秋桜祭展示
 - (2) スーザン・サザードさん日本公演ツアー「ナガサキを語り継ぐ」を終えて

I. 「国連原爆展」Web化のクラウドファンディング結果をご報告します。

昨年8月のNPT再検討会議に合わせて国連本部で展示した原爆展パネルのオンライン・ミュージアム「NOMORE Hiroshima & Nagasaki MUSEUM」(<https://hiroshima-nagasaki-museum.org/>)での公開のためのクラウドファンディングに、350万円の目標額に対して総計4,666,000円(12月1日現在)のご支援を頂きました。

まことに有り難うございました。このミュージアムは8月4日から日英二カ国語で公開しておりますが、目標を上回った資金は、今後さらに多言語での展開や、世界に向けての発信のために活用致します。

II. Webサイト「NOMORE Hiroshima & Nagasaki MUSEUM」の活用を呼びかけます。

このオンライン・ミュージアムは、いつでも、世界のどこからでも、パソコンやスマホを通して、国連本部で展示したのと同じパネルを観られます。大きなモニターTVやプロジェクターを使えば、同時に大人数で観ることもできます。

数次にわたる制作を通して、被団協の人びとによって練りに練られた決定版ともいえるこのミュージアムを是非ご覧ください。そして、原爆被害の実態を知り、被爆者の核廃絶のたたかひの歴史を学び、ノーモア・ヒバクシャの願いを継承・実現するために、どうぞご利用ください。さらに、鑑賞・学習・研究等での活用例をお知らせ頂ければ幸甚です。

Ⅲ. 当会の「認定 NPO 法人」資格が更新されました。

東京都より、5年間の活動の審査の結果、11月30日付で更新された「認定書」が届きました。これによって当会は認定 NPO 法人として、引き続き「令和5年4月11日から令和10年4月10日まで」有効となります。「認定 NPO 法人」は、寄附者の寄附行為に対し所得税や相続税の減免のための【受領証明書】を発行することができます。

Ⅳ. 関連活動のご報告

(1) 「原爆被害者の基本要件」を読み 未来のあり方を考える

昭和女子大学戦後史プロジェクト 2023 秋桜祭で展示

昭和女子大学「戦後史史料を後世に伝えるプロジェクト」は、明治学院大学・東京大学の学生を含む10名の学生で、11月11、12日に行われた秋桜祭にて研究パネル展示「被爆者たちが望む未来 あなたが望む未来—『原爆被害者の基本要件』を読む—」を開催しました。

「基本要件」の作成過程を研究

今展示でメインに取り上げたのは、被団協が1984年に発表した「原爆被害者の基本要件」（以下、基本要件）です。

基本要件の研究は今年4月から始めました。4～5月頃は基本要件が作られるプロセスを集中的に研究し、継承する会が所蔵する歴史史料を細かく分析することで、「被爆者要求調査」に寄せられた被爆者の声の基本要件に多数盛りこまれたことや、作成段階で全国の被爆者からの意見を広く募り、多くの人の思いが基本要件に結実していたことが分かりました。

6月には南浦和の継承する会資料庫を訪れ、要求調査の原票を見ました。その際、栗原さんから「被団協」新聞のハガキアンケートに被爆者援護法の制定を望む声が多数寄せられ、基本要件作成の気運が盛りあがったことを学びました。このことを受け7～8月には、史料の束から来場者に読んでもらいたい声を選んでいきました。

“40年間の被爆者の歩みが詰まった歴史の宝庫”

9～10月頃はパネルの展示内容の軸を決めるために、基本要件の本文を読み込みました。その過程で基本要件は、被爆後約40年間の被爆者の歩みが詰まった歴史の宝庫だと考えるようになりました。一方、基本要件を読むためには歴史的背景の知識が不可欠であり、パネルには解説をつけて来場者が考えるためのヒントを散りばめるように工夫しました。

展示は2章構成になっています。第1章では基本要件の策定過程を示し、実際に使用されたハガキや議事録などの生史料の展示を行い、第2章では基本要件の本文に注目し、言葉に隠された被爆者たちの望む未来を個人の声とともに展示しました。基本要件本文を見出しごとに紹介し、それぞれに対応する被爆者が基本要件を書いた歴史

的背景の解説と被爆者の生の声をまとめました。1章・2章を通して、パネルを担当した学生が、研究の過程で考えたことをワンポイントトークとして書きました。

一人ひとりが未来の在り方を考えるきっかけに

秋桜祭当日2日間を通して200名を超える皆様にご来場頂き、学内の学生をはじめ、



被団協関係者の皆様や被爆者の方とも交流を深めることができました。

「展示に呼んだ友人がしっかりとパネルを見てくれている姿を見て、難しい内容の展示でしたが基本要求を通して被爆者たちの訴えが伝わったと感じました。」(昭和女子大学1年 長畑明佳)

「パネル作成を通して被爆者がなぜ基本要求を書いたのかが少しずつ明らかとなっていき、展示

ではパネルがあることで来場者と話が広がり、さらに理解が深められた点が多くありました。」(明治学院大学2年 室田素良)

基本要求の研究を通して、学生一人ひとりが未来の在り方を考えるきっかけとなりました。今後も継承する会の史料を活用した研究を続けていきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

— 昭和女子大学「戦後史史料を後世に伝えるプロジェクト」—

(2) スーザン・サザードさん 日本公演ツアー「ナガサキを語り継ぐ」を終えて

12年という長い歳月を費やし『ナガサキ—核戦争後の人生』を執筆されたスーザン・サザードさんは、10月18日の広島を皮切りに、長崎、横浜、東京と巡る6講演全てを終えられ、11月4日にアメリカへと帰国されました。コロナ禍により来日の延期を余儀なくされていただけに、今回の講演に寄せる思いはスーザンさん、そして本書を翻訳した私にも強いものでありました。これまで何十年にもわたり被爆者に寄り添い交流を重ね、その声に耳を傾けてきたスーザンさんは、被爆者から何を学び、なぜ被爆者体験を伝え続けることが世界中の人達に大切な意味があるのかを、母国アメリカだけでなく世界各地で精力的に語ってきました。そして今回、その貴重なお話を日本の皆さんに届ける機会を得たのです。

スーザンさんと長崎との出逢いは半世紀も前に遡ります。16歳で鎌倉の高校に一年間留学したスーザンさんは九州への修学旅行で長崎を訪れ、原爆の展示品や写真に衝撃を受け、その体験は彼女の中にしっかりと刻まれました。そして、12年後の1986年、



長崎被爆者、谷口稜嘩(すみてる)さんとの運命的な出会いを経て2003年に本の執筆を決意し、12年にわたり幾度となく日本を訪れ、被爆者ら多くの方々と面談を重ね2015年に『ナガサキ』を完成させました。原爆当日の破壊のみならず、長い苦難の戦後を生き抜かれた被爆者の体験とその背後にある歴史的事

実を世界中の人達に伝えたいという強い思いが、『ナガサキ』に結実しました。

今回、全ての講演で、スーザンさんは1つ1つの言葉を丁寧にかみしめるかのように日本語で語っていきました。その途中で挿入された長崎の朗読グループ「永遠(とわ)の会」メンバーによる朗読によって、悲惨さの中に被爆者の人間としての息吹や温もりが感じられ、ひとり一人の人生がより身近なものとして私たちの胸に迫りました。

東京最終講演、聴衆の中には、50年前、留学中のスーザンさんがお世話になったご家族のお一人の姿がありました。「あの時、私を家族の一員として迎えてくださらなければ、『ナガサキ』は誕生しなかったでしょう」というスーザンさんの言葉は、その温かいお人柄と、何よりも日本、そして長崎との長く深い絆を表していました。

講演の最後に、「被爆者体験を語り継ぎ、その献身的な努力に学び、勇気をもって平和な世界を描き、作り上げていく。これからは私たちが、それに向かって行動する番です」と話すスーザンさんは、まさに身をもってそのことを実践してくれているのだと思うとともに、私たちも又、どんなに小さなことからでも、できることに向かって一歩ずつ歩み続けることで、共感の輪を広げ平和に向かって希望を紡いでいくことができるのではないかという強い思いが私の胸に沸き上がるのでした。

— 賛助会員 宇治川 康江—